

人生の意味の喪失と薬物依存：

フィンランド人NAメンバーAのライフストーリー¹⁾

南 保輔

論文要旨

フィンランド人のNAメンバー1人にインタビュー調査をおこなった。薬物依存からの回復や薬物使用の経緯などについて訊いた。インタビューを「ライフストーリー」としてまとめたうえで、NAメンバーの多くに共通するものと特異なものを取り上げて検討した。薬物政策のちがいはあるものの、薬物依存の経験や回復経験には日本のNAメンバーと多くの共通点が見られた。

回復後の就労やアルコール摂取、宗教とNAの「ハイヤーパワー」との関係については、フィンランドならではの見解を聞くこともできた。

総じて、人生の意味の喪失ゆえに薬物依存となることの苦しみや回復の困難さは文化や制度の違いはあるとしても、その過酷さに大きな違いはないという結論にいたった。

キーワード：回復、薬物依存、NA、フィンランド、ライフストーリー

1 はじめに

日本の薬物政策は「ゼロ・トレランス」の厳罰主義である（丸山 2010, 2020）。この政策のために日本の薬物依存者の状況や経験は諸外国とどのように異なっているのだろうか。

南は、2019年度の海外研修の機会に海外の薬物依存者の状況を調べる目的でいくつかの調査を行った。フィンランドとポルトガルにおいて自助グループであるNAのメンバーのインタビュー調査を実施した。ヨルダンでは、薬物依存者の治療施設を訪問し見学した。イスラム教国のヨルダンではアルコール摂取は禁止されている。隣国のシリアで内戦があり、薬物はシリア経由で流入しているということであった。

スイスのチューリッヒで開かれたヨーロッパNAのコンベンションにも参加した。NAについては次節で紹介するが、一言で言うと、薬物依存者の自助グループである。そのメンバーが集まって開かれるのがコンベンションである。2019年7月にはチューリッヒ中央駅裏の公園で開催された。この公園はかつては薬物売買がさかんにおこなわれた場所だった。回復しつつあるかつての依存者がその場所に集まって回復したすがたを社会の人びとに見せるというねらいがあった。

このスイスで開催されたヨーロッパNAコンベンションのことを知ったのは、本論文の調査協力者

1) 本研究は成城大学特別研究助成の研究成果である。

であるフィンランドの NA メンバー A さんのインタビューをしたときだった。ヘルシンキの NA オフィスでのインタビューだったが、そこに案内のポスターが掲示されていた。

そして、ポルトガル人の NA メンバーの B さんに出会ったのは、チューリッヒのヨーロッパ NA コンベンションの会場であった。4 人の男性グループでポルトガルからやってきていた。B さんは、4 人のうちただひとり英語を話すメンバーだった。後にポルトガルを訪問したときに、B さんは南が滞在するホテルにやってきてインタビュー調査に応じてくれた。また、もうひとりのポルトガル人 NA メンバーを B さんから紹介してもらうことができた。

本論文では、フィンランド人 NA メンバー A さんのインタビュー結果を提示して、考察をおこなう。調査結果を示すまえに、2 節で NA について簡単に紹介しておく。

2 NA について

NA (エヌエー) は、「Narcotics Anonymous (ナルコティクスアノニマス)」という薬物依存者の自助グループである。アルコール依存者の自助グループである AA (エーエー, Alcoholics Anonymous) 「のプログラムに参加していた人たちの中から生まれ」た (NA のウェブサイトより, <https://najapan.org/about-na>, 2022 年 11 月 27 日確認)。NA のウェブサイトによると、現在世界の 143 か国で毎週 7 万 6 千のミーティングが開かれている (<https://na.org/?ID=aboutus>, 2022 年 11 月 23 日確認)。

NA はミーティングを基本の活動とする。グループをつくって、毎週ミーティングを行う。NA メンバーはどこかのグループのメンバーであり、それを「ホームグループ」と呼ぶ。グループの代表が「リージョン」で集まって話し合うことがある。たとえば、日本はひとつのリージョンである。リージョンの下には「エリア」というまとまりがある。「北海道」や「東北」など日本では 11 のエリアがある。

NA の回復プログラムの柱のひとつが 12 ステップである。NA の 12 ステップは AA の 12 ステップを手本として作られている。NA メンバーは「先ゆく仲間」の 1 人にスポンサーを依頼し、その「スポンサー」となって 12 ステップを進めていく。NA の 12 ステップ全体は付録として論文末に掲載した。3 節の A さんのライフストーリーにおいてステップ 4 が話題となっている。

3 A さんのライフストーリー

本節では、A さんのインタビューを編集して「ライフストーリー」として示す。インタビューは南による英語でのもので、全体で 84 分ほどだった。録音にはオリンパスの IC レコーダ DS800 を使用した。インタビューの最後の部分はヨーロッパ各国の薬物依存者の状況についての情報を求めるものだったが、A さんはあまり他国の状況は知らないということだった。そのため、その部分は省いている。

インタビュー録音を editage という英文校正サービスに依頼して文字起こしをしてもらった。それを南が日本語に訳し、これを A さんのモノログとなるような形で編集した。口調は「です」、「ます」調にした。話題の順番は、インタビューのときとそれほど大きく変えないかたちになっている。注は脚注と二重丸括弧()を使った。いずれも南によるものである。個人情報保護の観点から一部○で特定を避けた部分がある。適宜英語を丸括弧内に表示した。地名などはローマ字表記のものもある。

生い立ち

2019年の夏の今日のこのインタビュー時点で、わたしは40歳でまもなくひとつ年を重ねます。両親はともにフィンランド中部出身のフィンランド人です。仕事のためにスウェーデンに移住しました。わたしはストックホルムで生まれて、27年間スウェーデンで暮らしました。その間何度もフィンランドを訪問しています。

わたしの父親は最初製紙工場で働き、その後長くバスの運転手をしていました。母親も製紙工場で最初は働きました。いまはわたしと同居して高齢者介護の仕事をしています。わたしには5歳以上年のはなれた弟がひとりいます。わたしは現在自営業をしています。マーケティングの仕事が中心です。

薬物経験

わたしの最初の薬物 (drug) 経験は12歳のときのアルコールでした。そして19歳のときにほかの薬物を始めました。最初は大麻で、2か月後にはほかの「ヘヴィー」なものも始めました。覚醒剤のアンフェタミン、エクスタシーやLSDです。2年後にはヘロインも始めました。その後数年間はあらゆる薬物を使いました。大麻を使いはじめたときは、自動車塗装の仕事をしていました。

薬物をやめようと思ったのは2002年のことでした。刑務所 (jail) から釈放されたときです。その後10年かかってようやくやめることができました。2012年からは薬物は使っていません。2002年にやめようと思ったまでは、やめることは考えませんでした。そのあいだに自動車塗装の仕事からは追い出されました。薬物を使っていたからです。2002年にフィンランドに移住してきました。最初は工場で働きました。雑誌や新聞の印刷工場でした。そこで半年間働いていまの仕事を始めました。

ストックホルムにいたときに逮捕されて施設収容されました。約1年間刑務所にいました。薬物の使用と売買の罪でした。同じようにフィンランドでも逮捕されました。そして売買の罪で起訴されました。しかし、判決は軽いもので刑務所に行くことはありませんでした。

断薬の取り組み

薬物をやめようとしてから実際にやめられるまでに10年かかっています。最初は、薬物を使用する時間がないほどに仕事に打ち込みました。しばらくのあいだ断薬はうまくいくのですが、そのうちに再使用となりました。スポーツを始めてみました。若いときはうまくいくのですが、そのうちにまた再使用となりました。そして、結婚して家族をもちました。これもしばらくは使用せずにいられることにつながるのですが、けっきょくは再使用となってしまいました。

それで医者にかかりました。そのときには違法と合法合わせて5種類の物質を使っていました。ベンゾジアゼピンという合法薬物、違法のアンフェタミン、そしてアルコールなどです。精神科の医者にベンゾジアゼピンのアディクション²⁾ 問題があると相談したのです。精神科医にかかる必要があると考え

2) 「addiction」を本論では「依存」としているが、ライフヒストリー内では「アディクション」と英語で表記する。

たのですが、断薬につながることはありませんでした。

そしてついにわたしは解毒をしました。イヤイヤのことでした。生まれた子どもの母親から薬物使用に対処することを求められたからです。対処しないと子どもには会わせないと言われました。そのとき、解毒のための病院スタッフからNAミーティングに行くべきだと言われました。

最初わたしは、「冗談じゃない」と思いました。自分には向かないと思ったのです。しかし、そのスタッフは「行かないとだめだ」とわたしに言い続けました。それでわたしはしぶしぶNAミーティングに出かけたのです。その初回ミーティング以来、わたしは薬物使用がとまり、ずっとクリーン³⁾を続けています。最初に精神科医に行ったのが2010年で、クリーンが始まったのは2012年のことでした。

NAについてはこのときより前には、わたしはあまりよく知りませんでした。AAのことは知っていました。テレビやいろんなところでAAについては聞くことができました。ですが、NAの「ほんとのところ」は知りませんでした。初めてNAのミーティングに行って、そこで人びとから直接話を聞いて、ようやくNAのことがわかりました。

わたしが薬物を使うのは、ひとりだったりだれかといっしょだったりしました。朝起きてまずなにかの薬物を使います。そしてそれから一日中使います。夜は眠るためにまた薬物を使います。日中使うときはひとりだったり、だれかといっしょだったりしました。

わたしが自分の事業を始めたころは、仕事中に薬物を使うことはありませんでした。ですが、2008年ごろには仕事でも薬物を使うようになっていました。仕事でも「打ちのめされて (wasted)」いました(薬物の効果下にあるということの表現かと思われる)。事業は友人との共同経営のものでわたしが半分所有していたので、仕事から追い出されることはありませんでした。

NAミーティングとの出会い

フィンランドのNAミーティングには、フィンランド語、スウェーデン語、そして英語のものがあります。わたしが初めて行ったのはフィンランド語のミーティングでした。

わたしが最初のNAミーティングで薬物をやめられると感じたのには2つの理由があります。そのひとつは、人びとに共感したからです。ひとりの男性が人生の話をしました。彼はある時期に長期にわたってLSDを使用したと話しました。そして、そのことに付随して生じる経験についても話しました。それはまさに、わたしの人生を語っているようでした。というのは、LSDを長期間使って同じようなことをしたというまさに同じ経験をわたしもしてきたからです。この話をわたしはしっかりと聞いて、人びとをしっかりと見ることになったのです。わたしは考えました。彼が使ったのは、わたしを感じていたのとまさに同じこと、同じ経験をしていたからであろうと。そうしてミーティング参加者を眺めると、

3) 「クリーン」とは、『回復』のプログラムにとりくむことで、薬物を使用せずに生きること。単に薬物をやめるだけでなく、生きるうえでのさまざまな課題に薬物を使わずにとりくみ、人間的に成長していくプロセスも含んでいると理解されることが多い。『クリーン〇年』『クリーンタイム〇年』というかたちでクリーンの期間を示すことがある(ダルク研究会 2013: 373)。アルコールを含む依存物質の使用に比べ、処方薬の不適切な使用も「クリーン」を終わらせるとされている。

ヤク中 (junkies) にはもはや見えませんでした。身なりもきちんとしていました。この男性は素敵な女性といっしょでした。パートナーであることがわかりました。手をつないでいたかなにかでした。ミーティング会場の外に出ると、良い自動車を持っていて幸せそうでした。幸せに見えました。NA ミーティングは、わたしにとってもうまくいくかもしれないと感じました。これがひとつの理由です。

ふたつめは、10年間心地よく (feel good) ありたいとそしてどうにかしてまともな (normal) 生活がしたいともがいてきたからです。それ以上使いたくなかったのです。なぜなら違法薬物を使用することは犯罪行為ですし、いろんないやなことが起こります。もううんざりだったのです。そんな生活に飽き飽きしていたのです。それがおそらくもうひとつの理由でしょう。薬物に飽き飽きして、選択肢が与えられたと感じたのです。

わたしが主として依存していた薬物は、スウェーデンにいたときはヘロインだったと思います。それがおもな薬物でした。ここフィンランドでは、アンフェタミンとコカインでした。いつも薬物を得るため、薬物のお金を得るために違法なことをしていました。そのために薬物の売買をしていました。押し込み強盗 (burglary) もしていました。盗みもしていました。自動車やなんでもです。そして暴力的な強盗 (robbery) といったこともしたことがあります。

専門家の支援としては、精神療法を1年間受けたことがあります。2009年か2010年のことです。わたしには悪夢を見るという問題がありました。それを治してもらえるのではないかと期待して1年間通いました。ですが良くなりませんでした。精神科についてはこれだけです。ほかに精神科の病気といったものはありません。

わたしはAAには行きませんでした。フィンランドには、薬物アディクト⁴⁾のための組織としてNAのほかにもいくつかあります。政府からの援助を受けて、アディクトのための良いことを提供しています。日中の居場所となり、薬物使用をやめたひとに会うことができます。しかし、わたしは以前はそういった場所に行ったことはありませんでした。NAに出会ってクリーンとなって、それからそういった組織にも行くようになりました。

NAにはスポンサーとスポンシーというフェロウシップ関係があります。わたしのスポンサーは7年まえから同じひとにお願いしています。いまわたしがスポンサーをしているスポンシーは6人います。

「アノニマスネーム」というのが日本にはあるのですか。フィンランドにはありません。とくに聞いたことはありません。わたしのファーストネームは〇〇ですが、ミーティングでは〇〇と呼ばれています。ミーティングで発言するときの最初は、「わたしは〇〇です。アディクトです」と発言するだけです。

クリーンを続けるために

わたしがクリーンを続けるためにしていることですか。それはプログラムが勧めている4つのことそのものです。わたしはそのすべてをしています。わたしは、12ステップをしています。そしてもちろん、

4) addict. 本文では「依存者」としているが、ライフヒストリーにおいては英語をそのまま「アディクト」としている。

スポンサーやスポンシーとコンタクトを保っています。それがステップワークの一部ですから、NAのサービスもしています。NA ミーティングにも定期的に行っています。

NA ミーティングに行くのは1週間に3回です。3回のミーティングですね週にだいたい、もし調子が悪いと感じたらもっと行きます。でもわたしにとっては週に3回がちょうどいい回数です。家族もそれでハッピーですし、わたしも家で調子がいいです。

いまいるこのミーティング会場ではスウェーデン語でのミーティングがおこなわれています。ほかのわたしが週に2回行くミーティング会場はフィンランド語でおこなわれるものです。

12ステップに関してですが、最近ようやく12ステップを終えたところです。「終わった」と言えるかどうかは実はこれからスポンサーが判断することです。いま、スポンサーにゆだねているところです。もし終わったとなると、またステップ1から再びやることになります。

NAのテキストは週に5回読みます。『今日だけ』(Narcotics Anonymous 1991)⁵⁾は毎朝週に5日読みます。ステップをするときにはベーシックテキスト⁶⁾を読みます(Narcotics Anonymous 2008)。そしてまた、NA ミーティングではベーシックテキストを読みます。スポンサーやスポンシーと話をするのは1週間に4回から6回というところです。

家族

妻とは2003年にいっしょになりました。9歳の息子がいます。妻は結婚するまえからわたしの薬物使用のことは知っていました。ですが、大麻を吸う程度だったので彼女は「オーケー、オーケー」というかんじでした。2005年に結婚して、その後わたしの使用は年々深刻なものになっていきました。そしてついに、薬物をやめるか、家を出ていくかと迫られることになりました。2012年のことです。というわけで、妻はわたしの薬物を知らずに結婚したというわけではありません。ですが、問題が深刻化してわたしはそれを隠そうとしたが隠しきれなかったというところです。

フィンランドで薬物アディクトであること

ここフィンランドにおいて薬物アディクトはスティグマ視されるのかというと、部分的にはそうですね。というのは、みんなに「このひとは薬物アディクトだ」と言われましたから。わたしは、自分が薬物でハイになっていることはだれにもわからないだろうと思っていました。でも実際には、ひとはわかっていたのです。

ですので、わたしが自営業でなかったとしたら、リハビリのあと職につくのはすこしむずかしかったでしょう。ここフィンランドには多数のアディクトがいます。たとえば、使用をやめれば仕事はわりとかんたんに見つかります。多くのひとが学校に戻ったり専門職についたりします。もしはたらきたけれ

5) 引用文献リストには英語版の書誌情報を挙示した。日本語版のタイトルが『今日だけ』である。

6) 「ベーシックテキスト」は、『Narcotics Anonymous』という書名のNAの基本文献の愛称である。各国の言語に翻訳されており日本語版もある(Narcotics Anonymous 2006)。英語版は2008年に第6版が出版されている(Narcotics Anonymous 2008)。上記の日本語最新版は第5版の翻訳である。

ば、薬物の使用をやめれば仕事を見つけるのはそれほどむずかしくはありません。つねになんらかの仕事はあります。もちろん、セキュリティチェックなんかが厳しい、機密情報をつかうような仕事もあります。そういった仕事には、アディクトはつけませんけどね。ただ、なにかはたらかしたいというアディクトはみんな仕事につくことはできると思います。

NAでのサービス

いまのわたしのNAでの務めはリージョンのPIコーディネータ⁷⁾です。もちろんホームグループでのサービスもしています。ディストリクトレベル⁸⁾の役職についていたこともあります。いまはありませんが。

フィンランドでは週に170回ミーティングが開かれています。けっこうな数です。ここヘルシンキでは、思うに週に約70回のミーティングがあるでしょう。ですので毎日5回以上のミーティングが開かれています。もちろんもっと小さな都市ではミーティングの数も少なくなります。

ヨーロッパ各国との比較

薬物アディクションの状況は、ここフィンランドはほかの北の国とほぼ同じでしょう。フィンランドとスウェーデン、ノルウェー、デンマークで違いはありません。ほぼ同じです。実をいうと、ほかのヨーロッパの国では違いがあるかもしれません。アルコールがそうです。フィンランドでもアルコールはふつうのことですが。

ポーランドやチェコもそうです。アルコールはほんとうにふつうです。小さなときから飲みはじめます。酔っ払うほど飲むひとは多くはありませんが、毎食みんな飲みます。そういった国ではクリーンにならないアディクトが多数います。アルコールをやめないからです。

でもここフィンランドやスウェーデン、ノルウェー、デンマークのような北の国ではアディクトは、わたしたちはアルコールも使うことができないと知っています。わたしたちはアルコールはだめだとわかっているからNAメンバーがたくさんいます。

あなたが言うようにヨーロッパで薬物政策が特徴的な国としてポルトガルがありますが、ポルトガルの状況についてはあまり知りません。フィンランドでは薬物はいまは非合法で、単純使用者を警察は逮捕しようとしています。そして、使用者ではなくて薬物の売人を逮捕するようにすべきだと警察は考えています。なので変化が生じつつあります。5、6年前ぐらいから生じている変化かと思われます。

7) PIはpublic informationの略で、日本のNAのウェブサイトには「PIコミティでは、ステップや伝統、概念のスピリチュアルな原理に従って広報活動を実施し、NAの一般的なイメージ・評価を高めることをめざしています」とある (<https://najapan.org/service/service-shoukai/pi>, 2022年11月30日確認)。

8) 「リージョン」が日本と同じように国レベルのことでフィンランドだとすると、その下のレベルは上述のように日本では「エリア」と呼ばれる。Aさんが「ディストリクト」と言ったのは、日本の「エリア」に相当するものではないかと推定される。

宗教について

わたしは、教会にはときどき行きます。クリスマスに家族を教会に連れて行くのが好きです。結婚式とお葬式にも行きます。でも、毎週日曜日に教会に行くといったことはしません。わたしのような人間は、フィンランドでは平均的だと思います。宗教的な人びとというのは少数派だと思います。

キリスト教とNAの考え方の類似点という話題に関連してです。わたしにはとても親しい友人がいます。彼女は司祭 (priest) ではありませんが、英語でなんと呼ばれるのかわかりませんが、deacon (助祭) です。いずれにしても教会につとめるひとです。この点について彼女と多くの話をしました。彼女は、キリスト教と同じかたいへん似ている面がNAには多くあると言います。ベーシックテキストに見出す内容です。それと似たことを聖書のどこかに見つけることができます。

ですが、わたしは個人的にはそのようには感じていません。神あるいはハイヤーパワー、わたしのハイヤーパワーは宗教的な神あるいはキリスト教の神とは関係がありません。それは、わたしの理解するところの神です。このことを彼女とわたしは議論しました。ほかのひとともこの宗教的側面について議論しました。NAがここフィンランドでうまくいっているのはキリスト教が多くあるからで、イランでうまくいくのはイスラム教が多くあるからだということです。

それでは日本ではどうかというと、どうでしょうか。さあ、でも日本でもNAがさかんであるということが、ベーシックテキストがある特定の宗教のものではないという証拠になるかもしれません。なぜなら、でなければNAの教えがどこでもうまくいくということにはならないからです。

アディクトの状況

薬物以外のアディクションをかかえているメンバーはいます。わたしたちのNAメンバーでギャンブルの問題もかかえているひとは多くいます。性アディクションもあるひともいます。でもほかのアディクションは多かれ少なかれわたしたちがアディクションとなるいろいろなものに似ています。気持ちが良ければ依存します。ジムに行くことにわたしは依存しているといったことです。でも、ギャンブルはほんとうに問題です。なぜなら薬物でそうなるのとおなじように生活をこわすからです。そして性アディクションもそうです。でもそうですね、メンバーにはあらゆるアディクションをかかえているひとがいます。そういったひとはGA (Gamblers Anonymous) やSA (Sexaholics Anonymous) にも行きます。

いまインタビューがおこなわれているこの場所はNAのオフィスです。ここでは何種類ものミーティングがあります。そしてディストリクトのミーティングもここにあります。ここはNA専用で使えるヘルシンキで唯一の場所です。ほかのミーティングでは、場所を1時間や2時間などと借りています。でもここはNAのみです。そして、Turku⁹⁾ と Tampere¹⁰⁾ にも似たスペースがあります。NAのオフィススペースです。ほかのミーティングでは教会とかコミュニティセンターを使います。そしてNAミー

9) 2021年の人口は19万人あまりで、フィンランドで6番目の規模である。

10) 2011年の統計によると都市地域の人口は33万人あまりで、フィンランドでヘルシンキについて都市地域では第2の規模である。

ティングのあるものは、ここと同じような場所です。ここの種類の建物には、このようなスペースがあってそこを借り（hire）たりできます。それに比べて、教会とかで部屋を2時間借りてということができません。

フィンランドでは、多くのNAメンバーがタバコを吸います。日本でも同じなのですね。

薬物使用の経緯

どうして薬物を使うようになったかについてわたしにははっきりした考えがあります。長い話になります。短くするように努めましょう。小さな子どもだったとき、さきにお話しましたがいつもフィンランドに来ていました。フィンランドにいとこがいました。当時10歳とかそれぐらいだったと思います。大きくなったらいっしょに事業をしようという計画を立てたのです。自動車修理の事業です。いとこが金属加工をしてわたしが塗装担当です。

19歳のときにこの計画がありました。生涯の計画です。そのための準備をしました。教育を受けました。わたしは自動車塗装の教育を受けて、彼は金属加工をするための教育を受けました。わたしは1994年にフィンランドに移住することになっていました。軍役をするためにやってきました。その後もフィンランドにとどまることになっていました。

ここに来て陸軍に入りました。週末は休みでした。いとことドライブをしていました。夜に出かけてある男性に会いました。ある都市からべつの都市まで彼の車を運転してくれないかと頼んできたのです（これら2都市をGoogleマップで見ると約140kmの距離で、所要時間は1時間47分と出る）。夜でわたしたちは疲れていたのですが、「まあ、いいかもね」と答えたのです。すると彼はお金を払うと言って支払ったのです。いくらだったかはわたしは知りません。でも、若者にとってはかなりの金額でした。それでわたしたちは彼を頼まれた町まで運転して行きました。

そして彼を乗せて彼の車で乗せて行って、そして帰ってきました。いとこが運転してわたしは助手席に乗っていました。そして彼が居眠りをしてわたしも眠って、わたしたちはまっすぐ林に突っ込んで衝突してしまい彼が死んだのです。わたしは背中をやられました。折れました。そのあとわたしはスウェーデンに連れ戻されました。背中が折れて陸軍にいられなかったからです。両親はわたしをスウェーデンに連れて行きました。わたしは6か月かそこら病院のベッドにいました。

ベッドから起き上がれるようになると、いまなにをするべきかを考えはじめました。人生にもはや意味がないように感じました。10歳のときから計画していたこのことがあったのですが、いまや夢はなくなったのです。なにをするべきかわかりません。そのときにある男性がいたのです。わたしはアルコールを少し飲んでいました。「ほら大麻を吸ったらどうだ」と言うのです。そして薬物を始めたら、わたしは「いま大丈夫、また大丈夫になった」と人生に意味を見つけたのです。そして、ストックホルムで一番の犯罪者（criminal guy）になってやろうと考えました。

それ以来、それがわたしの人生の意味となりました。それが、わたしが使い始めた理由です。人生の計画が消え失せてなくなったと感じて、そのときに薬物がやってきたのです。

精神療法にかかったときにこの話をしたかと質問されましたが、しました。いやどうでしょうか。実

のところ、この話を精神療法家にしたかどうかははっきりしません。なぜならその時点ではわたしがかかえていた痛みといたことを失った出来事とを十分に理解した (gone through) というかんじではなかったのです。わたしはそれをステップ4¹¹⁾ までしませんでした。わたしはただそれを押しやっ、なにもそのことと関係があるとは考えなかったのです。年月が経過して、そのことがすべてに影響しているのがわかります。いや、おそらくわたしはそのことを精神療法家に言うことさえしなかったのでしょう。

ほかのNAメンバーも、わたしと同じように人生における喪失の問題、目的や意味の喪失の問題をかかえています。あるいは、最初からたいへんに困難な子ども時代をすごしたかのどちらかです。親が薬物を使っていて、ずっとそんな中で育ったのです。ですので、あるトラウマの出来事が人生であったか、あるいは人生が全体的にトラウマだったかといえます。

幸福度調査

国民の幸福度調査でフィンランドが世界でトップだという調査結果を聞いたことがあるかですか。ええ、聞いたことがあります、ええ。でもわたしはおかしなことだと思います。わたしの世代より上の世代は、なにかについて語るということに慣れていません。口をつぐんで、《アルコールか》なにかを飲んで対処します。なにかを語るということに慣れていないのです。でも、人びとと世代に変化があるとわたしは思います。

わたしはいま20歳のように感じますが、じきに40代後半になります。ですので若者というわけではありません。わたしの周囲の人びと、そしてわたしの年代の人びとは基本的に幸せです。そして、幸せである多くの良い理由があります。そんな話をわたしは多く聞きました。同僚のひとりには心臓病をかかえています。心臓移植が必要でした。最初は人工心臓を入れました。そしてドナーが見つかって移植をしました。わたしたちはそのことについていつも話しました。手術全部やそのほかのことについてです。そして彼の負担は170ユーロでした。ほんとうにはした金です。

それだけの医療ケアをほぼ無料で受けられるということは幸せになれるほんとうになにかでしょう。もしこれが他の国であって医療保険がなければ、死んでいたでしょう。このようにフィンランドには、良いことがたくさんあります。ここの基本的なセキュリティもそうです。通りを歩いていて強盗にあうことはありません。フィンランドで通りを歩いていて強盗にあうような場所はほんとうにすこしです。たとえばの話ですが、わたしの考えでは、このような基本的なセキュリティがフィンランド国民を幸せな国民としているのだと思います、わたしが思うに。

フィンランドの教育

フィンランドの学校はほんとうに良いです。わたしの子どもが学校が好きかどうかはわかりません。ほかの子どもと同じか、あるいは、わたしに似ているのか。わたしが、学校はおかしい (funny) かと

11) 2012年にAさんはNAメンバーとなっている。ステップはNAメンバーとなり、スポンサーを見つけてから取り組むものである。Aさんがステップ4をしたのは、その2012年以降のこととなる。

聞くと、いや、いやいやいや、学校はおかしくはないと言います。でも学校にはきちんと行きます。だからわたしは、彼が学校を好きだと思います。良いところです。いつも学校でたのしくしています。友だちと会って、良い子にしています。算数といくつかの教科が得意です。学校ですらないろんな種類のことすべてです。彼はいつも学校がないほうが良い、学校はおもしろくないと言っています。教師がいて、やらないといけないことがあって。でも、彼は学校が好きなのだと思っています。

現時点では、ここフィンランドでは軍役はいまだに義務だと思います。なので、変更がなければ息子は行かなければなりません。スウェーデンでは軍役はもはや義務ではありません。希望すれば行くことができます。フィンランドでもある時点ではそうなるかもしれないと思っています。でも現時点では、全員軍隊に行かなければなりません。期間は最短だと9か月だと思います。

回復について

わたしにとっての回復ですか。わたしにとって回復は、人生の視角 (perspective) の変化です。わたしがクリーンになったとき、基本的なものはありました。アディクトの多くがクリーンになったときには持っていなかったものです。クリーンになった人びとの多くは、家がなかったり仕事なかったり、あるいは家族がなかったりします。でもわたしがクリーンになったときには、こういったものがありました。神のおかげです。失う必要がありませんでした。わたしにとっては、世界をどのように見るか、そしてほかのひとにたいしてどのようにふるまうかでした。そして、大きな大きな事柄、わたしにとって最大のことは、わたしが一番たいせつであり、わたしの思い通りにいかななくてはならないというわけではなかったということです。

人生をあるがままに受け入れて、人びとにナイスであろうとすること、人びとを助けて、なにもとめることなしに。たとえば、わたしがこれをやるからこれだけ返しなさいとかなしに、ただ人びとを助けて、ナイスで fragile (謙虚でといったところか) であってということです。以前のわたしはそうではありませんでした。薬物を使用していて、そういった生活をしているときには感情を示すことはできません。なので今日では、本当の友がいますし、どんなミーティングでもどんな町でも、もしも泣きたくなったら泣くことができます。そのことで、わたしが不利になることはない知っているからです。

わたしは感情を見せることができますし、傷つきやすく (fragile) あることもできます。そしてわたしの役目 (part) を務めるときに、家族や職場の人びと、そしてもちろん NA メンバーとみんなにたいして毎日最善を尽くそうとしています。そのことはもはやわたしのためにといったことではありません。それがわたしにとっての回復です。

薬物の欲求

いまの薬物の欲求について話します。わたしが薬物を最後に使ってから7年になります。いまでは最初のころのように渴望といったたぐいのものはもはやありません。それは身体的なものです。かつては、なにか摂取しないといけないというかんじでした。しかしいまでは、年月のあいだになにかまた変わったものがあります。はじめのころは、困難なとき、困難な状況やなにかでした。そんなときに最初の考

えは、「使っちゃえ、なんか使っちゃえ、使えば、楽に感じるようになる」というものでした。

その考えがひとたび去ると、そのあとはいつも難しい瞬間でした。その時の最初の考えは暴力を使え、攻撃的になれというものでした。わたしの心が薬物を使っただけというかわりに、彼を打てと言うのです。最近では、もはやそんな反応はありません。最後に使いたくなったときのことを思い出そうとしています。そんな気持ちになったことはもう、ほんとうに長い長いあいだありません。

そのような種類の渴望を持つことはもはやありません。なぜなら、それがもはや解決策にならないからです。それは、もはやわたしの中にはありません。それはけっして解決策ではないのです。それを持つことはもはやありません。でも、どうしてそれを持たないかがわかります。ミーティングに行って、サーヴィスをしているからです。ステップワークをします。薬物に戻る人びと、メンバーはたくさんいます。ふつうその理由はミーティングに行く回数が減って、そして後退してしまう（fall back）のです。

わたしたちは薬物について、使うことについてあまり話しません。でもときどきだれかと話すことがあります。これをやったあれをやった。そして使っていて良かったときもあります。でも最近は薬物などについて話すときでも、使いたいとは思いません。ですがもちろん、わたしの知っているメンバーでリラプス（再使用）するひとはいます。

フィンランドのNA コンベンション

フィンランドにもNA コンベンションがあります。昨年夏にLahtiというところでありました。参加者は650人ほどでした。いま、わたしたちはECCNA（European Conference and Convention of Narcotics Anonymous）コンベンションを計画しています。ヨーロッパ地区のもので、毎回違う国で開催されます。そして、2023年のECCNA コンベンションをフィンランドで開催しようとしています。ですので、小さなコンベンションと大きなコンベンションがあります。毎年いくつかあります。

わたしは、これまでECCNA コンベンションに3回行きました。ギリシャとイギリス、そして覚えていませんがどこかです。そして世界コンベンションにも行ったことがあります。NAが60周年のときにフィラデルフィアに行きました。そこでは3万人のアディクトが一堂に会したのです。フィラデルフィア市全体がアディクトに満ちていました。すてきなことでした。

フィンランドのアディクト

フィンランドにおけるNAメンバーの使用薬物の種類について言うと、大麻のみを使っているメンバーはほんのわずかです。多くはありません。ふつうは、わたしたちのメンバーの多くは、彼らはある種の、あるやり方で底つきします（hit rock bottom）。実を言うと、大麻だけの問題をかかえている男性をひとりだけ知っています。最近メンバーが使っている薬物はすべての種類のくるった（crazy）薬物です。そのために短期間でほんとうに悪い状態になるのです。それは、あなたのおっしゃるとおり合成薬物です。

日本であなたが話を聞いたひとで、刑務所に10回以上行ったひとがいるとのことでした。フィンランドにもそういったひとはいます。ずっと刑務所に行って長期の判決をもらうひとも多くいます。わた

しの親友のひとり、彼がNAに来たときにはそれまで薬物を使っていた期間はさて25年だったでしょうか。そのうち15年刑務所にいたのです。出所して2か月自由で、また戻ってです。判決は1年からさて長いものでは5年とかでしょうか。そんなかんじでした。

フィンランドの警察は最近では薬物使用のみでは逮捕に熱心ではないとさきほど申し上げました。薬物を使用しているという理由だけでは逮捕しようとしません。ですので、ほかのことをしているときです。押し込み強盗をしたりほかのなにかをしたら逮捕されます。なにか違法なこと、薬物を売買したりなにかを盗んだりしたらすぐに捕まります。以前は使っただけで人びとを逮捕していました。でもいまはそれには意味がありません。

日本の女性受刑者のあいだでは薬物関連のひとが多いということですが、フィンランドでも同じかそれ以上です。わたしは、3週間に1回刑務所（prison）にサーヴィスに行きます。行って、NAミーティングをします。閉鎖型の刑務所（prison）です。嚴重警備の刑務所（high security prison）です。彼らにはどこかに行く可能性がありません。被収容者の90パーセント以上は薬物関連の犯罪で入っている人たちです。

もちろん、わたしがいっしょにミーティングをしている男性たちは薬物を使用していたから犯罪をおかしたのです。でもほかの男性たちもです。どこかの時点で薬物が関係しています。しらふで犯罪をするひとはここでは多くありません。経済的な犯罪といったものですが、その90パーセント以上が薬物がらみだとわたしは思います。

刑務所に行ったときにわたしが伝えるのは、NAがあるということです。わたしたちはこのいま行っている刑務所に、これまで15年とか行っているのだと思います。そこに行って、新しく入ってきたひとがいたら、NAがどんなものか話して短いプレゼンテーションをします。NAではみなさんは歓迎されると話して、そしてNAミーティングをします。数年の懲役刑というひとには、NAについてのプレゼンテーションはしません。彼らはNAがなにかをすでに知っています。

わたしたちは小さなミーティングをします。彼らもわたしも分かち合いができます。もちろん、そうして刑務所から出所すると、NAのミーティングに行くのが容易なこととなります。すでにミーティングを使っているからです。わたしたちは多くの刑務所と協力関係にあります。

4 NAメンバーとしての回復

以上がAさんのライフストーリーである。繰り返すが、南の質問を取り込んで、Aさんのひとり語り（モノローグ）として構成したものである（永江 2002）。本節では、最初にライフストーリーと「客観的事実」の関係について本論の立場を述べる。そのうえでAさんの薬物依存からの回復経験にNAメンバーとして多く見られる点を論じる。

4-1 ライフストーリーの「事実性」

3節で提示したAさんのライフストーリーの検討を行うにあたって、その内容がいわゆる「客観的事実」をどの程度反映したものと位置づけるかを論じておきたい。まず指摘したいことだが、ひとの「経

験」がその身体や感覚と不可分である以上、「主観」と切り離すことはできない。記憶の問題もある (Loftus & Palmer 1974; Lancey et al. 2008, Loftus 2013; Kotre 1995=1997)。

出来事の詳細な経緯が「正確」に語られるかという点とそんなことはありえない。以下で取り上げる A さんの断薬だが、「最初に参加した NA ミーティングのあとは一度も薬物を使っていない」という言明に「精確に」対応する事実があったのかどうかは本論文では問題にしない。A さんがそのように理解して語っているということだ。

NA メンバーの場合、このような「事実」はミーティングなどの場で繰り返し語られるものである。そういったなかである程度確立した「ストーリー」となっていくものだ。南はかつて日本の NA メンバーのひとりに継続的にインタビュー調査をおこなって、労役経験の語りの変遷を調べた。その意味づけが時の経過とともに変化していることを見出した (南 2015b, 2017, 2018)。

本論においても、「客観的事実」そのものよりも、出来事をどのようにとらえて「経験」し意味づけているかという観点から A さんのライフストーリーの検討を行う。本節ではまず、多くの依存者に共通してみられるものを論じる。A さん「自身の経験」と捉えることができるものだ。

4-2 断薬のはじまり

最初の NA ミーティング以来クリーンであると A さんは言う。その理由として A さんは2つのことをあげる。「そのひとつは、人びとに共感したからです」と A さんは言う。その部分を以下に再掲する。

わたしが最初の NA ミーティングで薬物をやめられると感じたのには2つの理由があります。そのひとつは、人びとに共感したからです。ひとりの男性が人生の話をしました。彼はある時期に長期にわたって LSD を使用したと話しました。そして、そのことに付随して生じる経験についても話しました。それはまさに、わたしの人生を語っているようでした。というのは、LSD を長期間使って同じようなことをしたというまさに同じ経験をわたしもしてきたからです。この話をわたしはしっかりと聞いて、人びとをしっかりと見ることになったのです。わたしは考えました。彼が使ったのは、わたしが感じていたのとまさに同じこと、同じ経験をしていたからであろうと。そうしてミーティング参加者を眺めると、ヤク中 (junkies) にはもはや見えませんでした。身なりもきちんとしていました。この男性は素敵な女性といっしょでした。パートナーであることがわかりました。手をつないでいたかなにかでした。ミーティング会場の外に出ると、良い自動車を持っていて幸せそうでした。幸せに見えました。NA ミーティングは、わたしにとってもうまくいくかもしれないと感じました。これがひとつの理由です。

A さんが「共感したから」とまとめているが、ここには2つの位相がある。ひとつは「共感」ということばが前提としている「同じ経験」をしていると気づいたことである。もうひとつは、そのような経験をしたひとりが回復している姿を目の当たりにしたことである。

A さんの「それはまさに、わたしの人生を語っているようでした。」という発言は、LSD 経験をした

男性と自身との共通性を見出したと主張している。「同じようなことをしたというまさに同じ経験をわたしもしてきた」とも述べている。

「同じ経験」をしてきたひととの出会いが「同じ問題」をかかえる者にとって決定的に重要なものであることはさまざまな当事者が語っている。たとえばアスペルガー症候群である綾屋は、「同じカテゴリー」のひととの出会いを通じて得たことなどを踏まえて「こんなに心強いことは今までにないと思った」と述べている（綾屋・熊谷 2010：64）。南が観察調査した女子少年院に収容されて薬物離脱の教育プログラムに参加している少年¹²⁾は、「あ、いっしょなんや」と思って「気持ちが前向きになった」と述べた（南 2015a：5）。この少年はそれまでは、周囲に「わかってもらえない」と孤立感をつのらせていたこともあり、プログラムに取り組むモチベーションも高まったという。

重要な位相の2つめは、「NA ミーティングは、わたしにとってもうまくいくかもしれないと感じました」という回復への希望にかかわるものである。断薬を思い立ってAさんはいろいろなことをこころみ、薬物を使う時間ができないように仕事に打ち込んだり、スポーツを始めたり、家族をもったりである。いずれも最初のうちはうまくいくが、そのうちに薬物の再使用となってしまう。精神療法にも通った。10年間いろいろとやってみたがだめだった。だが、回復してすてきなパートナーと自家用車を持っている男性の姿を見て、「わたしにとってもうまくいくかもしれない」と思った。

このように回復した姿を見せることはNAのベーシックテキストにおいても強調されている。NAのステップ12は「これらのステップを経た結果、スピリチュアルに目覚め、この話をアディクトに伝え、また自分のあらゆることにこの原理を実践するように努力した」というものである。この部分の最後に以下の一節がある。

そう、私たちは希望という未来への展望を示している。私たちこそ、プログラムが実際に効果があることを示す見本なのだ。クリーンに生きることでつकんだ私たちの喜びこそが、まだ苦しんでいるアディクトたちをひきつけるものになるのだ。（Narcotics Anonymous 2006: 85）

「まだ苦しんでいるアディクト」であった当時のAさんは、LSDの依存経験からの回復を語った男性に「希望という未来への展望」を見出し、「NA ミーティングは、わたしにとってもうまくいくかもしれないと感じました」と言ったのである。まさにステップ12が描いているような出会いとしてAさんは初めてのNA ミーティングを語っている。

4-3 人生の意味の喪失

前項で示したようにAさんの薬物依存からの回復の契機は、NAメンバーにとって「典型的」というか、ベーシックテキストが描き出しているものだった。一方、薬物使用の始まりはというと、「典型的」といえるものはない。とはいうものの、「人生の意味」あるいは「生きがい」の喪失はわりと多くの

12) 少年院においては収容されている者は女性も「少年」と呼ばれる。

NA メンバーが挙げるものである。

Aさんは10歳のときからの人生の計画があった。いとこと共同で自動車修理業をすることだった。そのための準備を始めた直後あたりの時点で2人で自動車事故にあい、いとこを死なせている。Aさん自身は全治6か月だった。そのときの心情が以下である。

ベッドから起き上がれるようになると、いまなにをすべきかを考えはじめました。人生にもはや意味がないように感じました。10歳のときから計画していたこのことがあったのですが、いまや夢はなくなったのです。なにをすべきかわかりません。そのときにひとりの男性がいたのです。わたしはアルコールを少し飲んでいました。「ほら大麻を吸ったらどうだ」と言うのです。そして薬物を始めたら、わたしは「いま大丈夫、また大丈夫になった」と人生に意味を見つけたのです。そして、ストックホルムで一番の犯罪者 (criminal guy) になってやろうと考えました。

Aさんは19歳のときの自動車事故で、いっしょに自動車修理の事業をやろうと「10歳のときから計画していた」パートナーのいとこを失った。事故のケガが回復してくると「人生にもはや意味がないように感じ」た。「いまや夢はなくなった」とも感じている。夢の喪失、生きがいの喪失である。

Aさんの薬物使用は大麻に始まって、アンフェタミンやエクスタシーとLSD、そしてヘロインとどんどん「ヘヴィー」なものとなっていった。初めて使ってから8年間はやめようとは思わなかった。だが、刑事施設収容や逮捕などを経てパートナーからのことばもあって「やめる」と決意している。使用する薬物が「ヘヴィー」なものになって「生きることがどうにもならなくなって」(Narcotics Anonymous 2006: 30) しまうことはNAメンバーの多くに共通して見られるものである。

4-4 ステップワークを通じての気づき

Aさんは「どうしてわたしが薬物を使うようになったかについてはっきりした考えがあります」と明言する。だが、それは回復のプロセスにおいて見いだされたものである。経験の意味づけが回顧的、遡及的になされていることのなよりの証拠である。

4-3項でみたように、いとこの事故死による人生の意味の喪失が薬物使用の根底にある。だがそのことに思い至るまでには時間がかかった。Aさんは断薬を思い立って、運動をしたり家族を持ったりした。精神療法にも通ったが、Aさんを苦しめていた悪夢と事故との結びつきが指摘されることはなかった。以下は4-3項に再掲した語りの続きの部分である。

それ以来、それがわたしの人生の意味となりました。それが、わたしが使い始めた理由です。人生の計画が消え失せてなくなったと感じて、そのときに薬物がやってきたのです。

精神療法にかかったときにこの話をしたかと質問されましたが、しました。いやどうでしょうか。実のところ、この話を精神療法家にしたかどうかははっきりしません。なぜならその時点ではわたしがかかえていた痛みといとこを失った出来事とを十分に理解した (gone through) というかんじ

ではなかったのです。わたしはそれをステップ4までしませんでした。わたしはただそれを押しやって、なにもそのことと関係があるとは考えなかったのです。年月が経過して、そのことがすべてに影響しているのがわかります。いや、おそらくわたしはそのことを精神療法家に言うことさえしなかったのでしょう。

ステップ4でそれをしたとAさんは述べている。ステップ4は「私たちは、徹底して、恐れることなく、自分自身のモラルの棚卸表を作った。」というものである。ステップをおこなうときに使う『ステップワーキングガイド』によると、ステップ4においては「恨み」や「感情」、「罪悪感、羞恥心」、「恐れ」、「対人関係」、「セックス」、「虐待」、「秘密」といった項目にわたって「頭にうかんだこと」はすべてノートに書き出す（Narcotics Anonymous 2012: 52-63）。続くステップ5では、このノートを見せながらスポンサーと分かち合いをおこなう。

ステップ4とステップ5はまとめてとらえられている。NAメンバーとしての最重要のものである。たとえば、薬物依存からの回復支援施設であるダルク（DARC）入寮者の場合は、標準2年間のダルク入寮期間中はステップ1からステップ3に繰り返し取り組む。ステップ4は退寮してスポンサーを持つてから取り組むものとされている。

ここまで、AさんのNAとの出会い、薬物使用の始まり、ステップワークというNAメンバーに共通する局面を確認してきた。『ベーシックテキスト』や『ステップワーキングガイド』に描かれているように、NAメンバーに多く見られるものであり、フィンランド特有とすべきところはみられなかった。

5 Aさんの語る独自性

その一方で北欧フィンランドのNAメンバーであることに起因すると思われる特徴もうかがわれた。以下では、フィンランドという文脈とAさんの独自性にふれておきたい。

5-1 依存回復者の就労

薬物依存からの回復者の就労について、Aさんはフィンランドではそれほどの困難はないと述べている。セキュリティのきびしい仕事への就職はむずかしいかもしれないが、それ以外であればそれほど問題はないだろうとの見方をしている。

だが、Aさん自身は自営業である。だからこそ依存がはなはだしかったあいだも仕事を続けることができていた。仕事を続けられたことが断薬から回復する助けとなっていることは想像に難くない。家族がいたことも助けとなったであろう。

5-2 アルコールについて

NAではアルコールも依存「物質」の一部として禁じられている。飲酒をすると「クリーン」は終わる。Aさんは、薬物依存からの回復には断酒も欠かせないと考えている。薬物使用の始まりを12歳のときのアルコールと位置づけていることも特徴的である。

そんなAさんは、飲酒に寛容なポーランドやチェコのようなところには疑問を感じていた。¹³⁾ これらの国でNAメンバーがそれほど増えないのは、NAではアルコール使用をきびしく禁じていることが関係しているとAさんは考えている。

ポルトガルのNAメンバーであるBさんも、アルコールに関してAさんと同じ考えだった。NAメンバーなのだから当然のことではある。Bさんは、飲酒がほかの薬物の再使用につながるからとはっきり述べていた。

薬物依存者の回復を支援する組織でも、飲酒に寛容な団体もある。Aさんが言及したフィンランドの団体がそうであるかはわからない。だが、アルコールをほかの依存物質と同じとして禁じるのかどうか、それが断薬や回復とどのように結びつくのかは大いに注目すべき点である。

5-3 宗教

文化や社会の独自性を考えるうえで、もうひとつAさんの語りで興味深かったのが宗教とNAの関係である。12ステップには「ハイヤーパワー」ということばが出てくる。宗教的な「神」を想起させる表現である。キリスト教などの特定の宗教との結びつきがどれくらいかという点がNAメンバーのあいだでも議論となることが多いようである。

Aさん自身も、知人のNAメンバーでキリスト教の助祭をしている女性と議論したことがあるという。彼女はキリスト教とNAの教えとの親和性を強く感じるという考えだが、Aさんは対照的にそうではない。イスラム教社会や日本社会でもNAが根付いてそのメンバーも多いということが、その論拠だという。

この点については、南にはこれ以上論じる用意はない。NAメンバーにとっても、自分が信じる信仰の神とNAの教えでいう「ハイヤーパワー」との関係が気になるものだとすることを確認しておきたい。

6 結び

本論では、フィンランド人NAメンバーであるAさんのライフヒストリーを提示し、その後NAメンバーの多くが直面してきた局面である、自助グループにつながった場面、生きる意味の喪失、そして、ステップ4を通じての生きる意味の喪失と薬物使用との結びつけといったところをみてきた。これらは、多くのNAメンバーが共通して語ることであり、NAメンバーとなって回復した薬物依存者に多く見られるものである。

その一方、フィンランドにおいて薬物依存から回復することに特徴的なところもある。就労やアルコール、宗教といったものとの関係である。これらについては、Aさん自身が「直接的な」経験をしてきたことを語っているというわけではない。日常接しているほかのNAメンバーなどの言動を観察し

13) ほかにもアルコール摂取に寛容な国はあるだろうが、Aさんが訪問して疑問を感じる経験をした国としてインタビュー中に言及された国名である。

てのものである。4節がAさんにとっての「一次データ」とするならば、5節の内容は「二次データ」にもとづく観察と言うべきものであろう。

さて、本論の根底的な調査疑問は、厳罰主義の薬物政策ゆえに「日本の薬物依存者の状況や経験は諸外国とどのように異なっているのだろうか。」というものであった。フィンランドの薬物政策が、単純使用には寛容なものに変化してきているということはあるようだ。AさんはNA活動の一環として刑務所でのミーティングをしている。刑務所に収容されている薬物依存者たちとの接触を通じて感じていることだ。他方Aさん自身は、かつて逮捕されて刑務所に収容されたことがある。単純使用だけではなく、薬物の売買にくわえて窃盗や押し込み強盗などの犯罪もしたからだ。すべて薬物の代金のため、薬物使用のためであった。

Aさん自身が寛容な薬物政策の恩恵をどれだけ受けているのか、また、Aさんがこの点をどう考えているかは今回のインタビューからはわからない。刑罰よりも支援をという方向へとフィンランドでも方針転換がなされつつあるようで、近年の薬物依存者が恩恵を受けているとは感じているようだった。

薬物依存者の「回復」にとっては、直接的な処遇や支援にくわえて、社会全般による受け入れという側面も重要である。薬物依存者にたいするスティグマや差別という現象である。日本では薬物依存者へのスティグマは根強いものがある。ある調査では、業務として薬物依存者の支援をおこなっているひとたち（「全国2自治体の生活保護担当ケースワーカーと、全国69の精神保健福祉センターで精神保健福祉相談に携わる職員」）の284人に調査票サーヴェイを実施している。これらのひとの88.9パーセントは「現在の職場で薬物を使用したことのある人の支援を行うことがありますか」という項目に「はい」と回答している。これらのひとが「あなたが所属している組織の職員が、覚せい剤などの薬物を使用したことのある人のことをどう思っているかについて、あなたの意見をお伺いします。」という想定でたずねられたときに、「親友として喜んで受け入れる」かどうかについて4件法の「全くそう思わない」が10.8パーセント、「あまりそう思わない」63.4パーセントと回答している。つまり、ほぼ4分の3が「喜んで受け入れる」ということはないだろうと見ている。それほどスティグマが強いということである（片山宗紀・藤城聡・杉浦寛奈・白川教人，2022，『薬物を使用した人に対する意識・態度の調査研究報告書』https://www.ncnp.go.jp/nimh/yakubutsu/reference/pdf/report_20221202.pdf，2023年1月9日確認）。

スティグマに関係すると思われるAさんの語りは2箇所である。ひとつめは、Aさんが薬物を使っていることに周囲のひとが気づいたかという点である。Aさんはわからないだろうと思っていたが、どうも周囲の人間は気づいたようだということだった。ただし、そのために避けられたなどといったことは語られなかった。もうひとつは、就労である。高度のセキュリティが要求される仕事をのぞくと、薬物依存からの回復者が就労するのにフィンランドではたいした差別はないという見立てであった。この点では、薬物で刑務所に収容されていた期間の履歴の説明に対応することが求められる日本の薬物依存者の状況とは大きく違っている。¹⁴⁾

14) 関連する興味深い研究として Pager (2007) がある。Pager は白人と黒人の男性を2人ずつ入門レベル

比較すると、日本とフィンランドとでは、フィンランドの薬物依存者のほうが回復のための環境としては恵まれていると言えそうだ。しかし、全体的感触としては、薬物使用から依存となる生活の困難にはそれほどの違いはないように思われる。生きる意味を喪失して、絶望感から薬物使用にのめりこむ。それを続けるために違法行為に手をそめる。薬物使用が「自己治療」であるという指摘がある (Khantzian & Albanese 2008=2013)。そういった面は否定できないであろう。そのような状態を選択する「自由」も否定されるべきではないものなのかもしれない。だが、薬物依存という状況のもたらす苦しみと絶望感は、薬物政策や社会の寛容度の違いにかかわらず、深く大きなものであることにそれほどの違いはないという結論に至った。

引用文献

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎, 2010, 『つながりの作法——同じでもなく違うでもなく』NHK 出版。
- ダルク研究会, 2013, 『ダルクの日々——薬物依存者たちの生活と人生』知玄舎。
- 石川義孝, 2013, 「人口移動」人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版, 566-567。
- Khantzian, Edward J. and Mark J. Albanese, 2008. *Understanding Addiction as Self Medication: Finding Hope behind the Pain*, Lowman & Littlefield. (松本俊彦訳, 2013, 『人はなぜ依存症になるのか——自己治療としてのアディクション』星和書店。)
- Kotre, John, 1995, *White Gloves: How We Create Ourselves through Memory*, Free Press. (石山鈴子訳, 1997, 『記憶は嘘をつく』講談社。)
- Lancey, Cara, Erin K. Morris, Daniel M. Bernstein, Briana M. Wakefield and Elizabeth F. Loftus, 2008, “Asparagus, a Love Story: Healthier Eating Could Be Just a False Memory Away,” *Experimental Psychology* 55: 291-300.
- Loftus, Elizabeth, 2013, “How Reliable is Your Memory?” TED. (https://www.ted.com/talks/elizabeth_loftus_the_fiction_of_memory?language=ja, 2022年11月30日確認。)
- Loftus, Elizabeth F. and John C. Palmer, 1974, “Reconstruction of Automobile Destruction: An Example of the Interaction Between Language and Memory,” *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 13: 585-589.
- 丸山泰弘, 2010, 「アメリカ合衆国における薬物政策——「これまで」と「これから」」『龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報』7: 141-157。
- , 2020, 「世界の薬物政策はなぜ刑事罰を諦めたのか」松本俊彦編『アディクション・スタディーズ——薬物依存症を捉えなおす13章』日本評論社, 140-155。
- 南保輔, 2015a, 「薬物使用経験を「わかる」の3基盤——「矯正教育プログラム（薬物非行）」の質的分析」『コ

の仕事に応募させてその反応を見るという実験研究をアメリカのミルウォーキーでおこなった。それぞれの経歴を架空のものとして統制している。ペアでの違いは、犯罪歴の有無のみである。売買目的で薬物を所持していて逮捕され1年6か月刑務所に収容され、出所して1か月という想定である。この犯罪歴以外は同じとしている。その結果面接を受けたあとに連絡があったかどうかを従属変数として見ているが、白人で犯罪歴無しが34%, 犯罪歴有りで17%であるのにたいし、黒人では犯罪歴無しで17%, 犯罪歴有りで5%だった (Pager 2007)。Pagerの問題意識としては「犯罪歴」ということだが、薬物がらみの犯罪者にたいする社会の否定的な評価を示すものとしても見ることができる。

コミュニケーション紀要（成城大学大学院文学研究科）』26：1-30.

———, 2015b, 「ダルクスタッフとしての回復——薬物依存者の『社会復帰』のひとつのかたち」『成城文藝』232：74-47.

———, 2017, 「ターニングポイントはポイントではなくプロセスである——薬物依存からの回復における『労役経験』」『成城文藝』240：432-417.

———, 2018, 「スタッフを続けるのもおまかせ——ダルクスタッフAさんのライフヒストリー」『コミュニケーション紀要（成城大学大学院文学研究科）』29：13-40.

———, 2020, 「薬物依存症からの回復のターニングポイント——ダルクのエスノグラフィ」松本俊彦編『アディクション・スタディーズ』日本評論社, 43-65.

永江朗, 2002, 『インタビュー術!』講談社.

Narcotics Anonymous, 1991, *Just for Today: Daily Mediations for Recovering Addicts*, Narcotics Anonymous.

———, 2006, 『ナルコティクスアノニマス第五版日本語翻訳版』Narcotics Anonymous World Services.

———, 2008, *Narcotics Anonymous*, 6th. ed., Narcotics Anonymous World Services.

———, 2012, 『ナルコティクスアノニマスステップワーキングガイド』Narcotics Anonymous World Services.

Pager, Devah, 2007, *Marked: Race, Crime, and Finding Work in an Era of Mass Incarceration*, University of Chicago Press.

付録 NAの12のステップ

1. 私たちは、アディクションに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
2. 私たちは、自分より偉大な力が、私たちを正気に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちは、私たちの意志といのちを、自分で理解している神の配慮にゆだねる決心をした。
4. 私たちは、徹底して、恐れることなく、自分自身のモラルの棚卸表を作った。
5. 私たちは、神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
6. 私たちは、これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
7. 私たちは、自分の短所を取り除いて下さい、と謙虚に神に求めた。
8. 私たちは、私たちが傷つけたすべての人のリストを作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
9. 私たちは、その人たち、または他の人々を傷つけないかぎり、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
10. 私たちは、自分の生き方の棚卸を実行し続け、誤ったときは直ちに認めた。
11. 私たちは、自分で理解している神との意識的ふれあいを深めるために、私たちに向けられた神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
12. これらのステップを経た結果、スピリチュアルに目覚め、この話をアディクトに伝え、また自分のあらゆることにこの原理を実践するように努力した。

(NAの「ホワイトブック」より https://najapan.org/wp-content/uploads/2018/10/JP_WB.pdf, 2022年11月30日確認)

Loss of Meaning of Life and Drug Addiction: A Life Story of a Finnish NA Member

MINAMI Yasusuke (Seijo University)
yminami@seijo.ac.jp

ABSTRACT

A member of Narcotics Anonymous (NA) in Finland, Mr. A, was interviewed for his recovering process from drug addiction and how he had become a drug addict. What was told was edited and presented as a life story. Then, three aspects of his life experiences are discussed as typical and common among recovering NA members. First, Mr. A had attempted to stop using drugs in vain for a decade. But he quit using after he first attended a NA meeting. Second, Mr. A lost his cousin in a car accident. He had planned to start business with him. He lost meaning of life and started using drugs. Third, Mr. A understood that he had become addicted to drugs because of the loss of meaning of life through NA's step work, especially Step 4, which is "We made a searching and fearless moral inventory of ourselves."

Mr. A also talked about some features seemingly characteristic to Finnish society such as relative ease of finding job, stoic attitude against alcohol consumption, and interpretation concerning some religious aspect of the NA program.

Finally, it is concluded that life experiences of losing meaning of life and becoming addicted to drugs, and recovering from drug addiction is greatly painful and agonizing despite cultural and political differences such as drug control policies.

KEYWORDS: recovery, drug addiction, NA (Narcotics Anonymous), Finland, life story